

---

# IF 「仮定」の世界

宇野 宙人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IF 「仮定」の世界

### 【NZコード】

N8191X

### 【作者名】

宇野 宙人

### 【あらすじ】

IFという超能力が普通に存在する世界。その世界で平和な日常を望む主人公、鏡音友人はある日の帰り道に一つの事件と一人の少女に出会い。

そして、そこから始まる大きな事件に友人は嫌々ながらも巻き込まれていく。

## プロローグ

ここは超能力が人間の技術によつて理解・開発された未来の世界。超能力は *interference force* (干渉力) 締めて IF と呼ばれている。

その能力は、触れずにモノを動かす、遠く離れた人の意識を読み取る、炎や電気を生み出すなどさまざまあり、その力は計り知れなかつた。

故に世界は IF の力を受け入れる方向へと流れ、IF の力によつて世界は大きく進み、変わつていつた。

その結果、IF は世間に浸透し、IF が起こす常識はずれな事象も今では日常の一部と化していた。

## 第1話 「鏡音友人」の世界（前書き）

ども、宇野宙人です。初投稿なのでいろいろと戸惑いの連続です。拙い文章ですが、頑張って書きました。感想や文に対する指摘があれば、気軽に送ってください。

## 第1話 「鏡音友人」の世界

さて、今の状況をざつと説明しておこう。

オレの目の前には、およそ十数人のガラの悪い不良たち。そして、すぐ後ろにあるのは高い壁。

おまけにここは路地裏の一本道で、人が来るよつすも無い。

十人中十人が絶体絶命と答えるであろうこの場面の真つただ中にいる、オレこと鏡音友人はどうしてこんな状況になってしまったのか。それは三十分ほど前まで遡る。

発端はいつもと変わらない帰り道を一人で歩いている途中のことだつた。

見慣れた町並み、見慣れた空、そして見慣れた自分の家にもう少しで帰れるというところで、鞄からいきなりオレの携帯の着信音が鳴りだした。

携帯を取り出して、画面を見てみると、そこにはオレがよく知っている名前、七橋奏<sup>ななはしかな</sup>の三文字があつた。

（あいつ、また何か厄介事にでも首突つ込んだのかなあ。）

奏はオレの幼馴染で、とんでもなくお人好しな性格をしている。

そのため、困った人を見過<sup>い</sup>しておくことができず、そのせいだいろいろなトラブルにショットカットで出くわしているのだ。

そしてそのときは、（迷惑なことに）ほとんどの場合、一緒にいるオレも巻き込まれている。

故に、奏から電話をもらつたとき、真つ先に何かトラブルが起つたのではとオレが思うのも無理のない話というものだ。

だが、奏と一緒にいるために、オレがトラブルに巻き込まれることは多々あるが、奏からオレを直接トラブルに巻き込んだことは、一度も無い。（そもそも奏は、オレと違つて周りを巻き込もうとはせず、できるだけ自分の力だけで解決しようとするからな。）

考えすぎかと思い、俺は電話に出る。

「はい、もしもし」

「…………鏡音友人か？」

奏とは明らかに違つ、低い男の声が携帯から聞こえてきた。

「…………お前は誰だ？奏じゃないな」

「そうだ。お前の友達は今、俺たちが預かっている。返して欲しければ、二丁目にある廃工場まで來い。おつと、警察や先公には連絡すんじゃねえぞ。お友達を無事に助けたければな」

フハハハッと耳につく高笑いを最後に電話が切られた。

（やれやれ、また面倒なことに巻き込まれたのか。あいつは。）

はあ～っと長いため息の後、オレは渋々奏を救うべく廃工場へと向かつた。

その後ろでじつとオレを見続けている一羽のカラスに気付いたのは、そのまま後だった。

オレが電話を受けてから、三十分後。オレは二丁目の廃工場の裏側にいた。ここは、中にいる人間からは死角となっているため、オレの存在は気付かれていらない。

この廃工場は不良の溜まり場となっていることで有名な場所であり、現に、今も十数人の不良たちがたむろっている。

その中で、おそらくこの不良のボス的存在の奴（たぶん、オレに電話をしてきた男）の隣に、明らかに不良とは違う少年・奏がいた。（名前のせいで誤解されることが多いが、奏は男だ。しかも結構整った顔立ちをしていて、女子にとても人気がある。友達とはいえるが、むかつく。）

ここから見る限り、奏はかなりの暴行を加えられたようだ。体中がぼろぼろで、さつきから全く動いてない。

（まあ、あいつにとつてはこんなのは日常茶飯事なんだが、しかし、奏を捕まえたということは、あいつらの中に能力者がいるな。）

奏は能力者なので、普通の不良が奏を捕まえるのは極めて困難なこ

となのだ。

（まあ、そんなことはどうでもいいか。オレは、あいつらと共に作戦通りにやれば何も問題ないはずだ。）

「んじゃ、五分後に今聞かせた作戦を開始するから、これ自分の周りに置いて待つてろよ」

オレはやつ言ひと、手に持つていたビー玉を目の前にいるカラスにくわえさせた。

五分後、オレは百円ライターで、仕掛けておいた花火の導火線に火を点け、急いで物影に隠れる。

シュルシュルシュルルー・パーン。

結構大きな音が響き渡った。当然、この音を聞いた不良たちが何事か、とやつて来たり、音のした方へ注意を向ける。その一瞬の隙を俺たちは突く。上手くやつてくれよ！みんな。

「オイ！あいつはどこへ行つた。まさか、逃げられたのか？」

「分かんねえよーあの音に気を取られてる間にいなくなつちまつたんだ！」

怒鳴り声の後に困惑する声、こつこつ声が聞こえてきたといつことだ。は、作戦が成功したということだ。

ミシシッピ・コンパート。

さて、オレは奏を取り戻したから、後はこの物影に隠れながらこのまま不良たちがいなくなるまでやり過ごせば何も問題ない……

チャラララララララ

つてオイ、何でこのタイミングで携帯が鳴るんだあ！

「ん？ そこに隠れてこるのは誰だー！」

ああ、もひ。不良のボス的存在だった奴に見つかっちゃったじゃねえか。

このままじゃヤバいので、オレは全速力で廃工場から逃げた。すると当然の「ごとく、不良どもが追いかけてくるわけだが・・・・・多めがいるだろー」というか何で全員がこっちに向かって来るんだよおー！

そんなこんなで現在にいたるわけである。オレの携帯に電話した奴め、覚えてろよー！

「散々逃げまわっていたようだが、これでお前はもう逃げられないぜ

不良のボス的存在・・・もつ面倒だから不良Aとでもしておいつか、不良Aが勝ちを確信したような笑みを浮かべながら言った。

「つたく、無能力者じゅぱんじょのくせに、この俺を手こすらせやがつてよお！だが、それもここまでだ。さて、あのむかつく善人気取りの奏とかいう奴の分まで、憂さ晴らしさせてもらおつか！」

不良Aはそういうと、手の平から一瞬でサッカーボールくらいの大きさの炎の球を出した。やはりこいつは能力者だったか。

バイロキネシス  
発火能力。文字通り、炎を作り出す物理干渉系の工房。

炎を作り出すときの速さといい、大きさといい、結構な手練のようだ、とオレは目の前で起こったことを観察していた。

「ハツ、こいつ、ビビッて声も出せねえってか」「仕方ねえよ。これを見りや、誰だつてビビるぞ」「違えねえ」

不良Aとその取り巻きどもは、黙つているオレを恐怖で口が開かない勘違いしたらしく、ゲラゲラ笑い始めた。

「オイ、友人とかいつたか。今すぐこの俺に泣いて土下座すれば少しは痛い目みないよう、考えてやつてもいいぜ」

二タ二タと笑い、明らかに相手がどんな反応を示すか楽しんでいるような声。聞いてるだけで、不愉快になるな。

「オイ、どうした。何か言つてみてらうなんだ」

はあ～。俺は盛大なため息（今日で何回目だ）をついた後、不良Aに視線を向けながら言った。

「不良A」

「はあ？」

「お前は一つほど間違つて居る」

「ああ？ 何が間違つてるんだ？」

今まで黙つてた男が急に口を開き、意味深なことを言つたので、不良Aは自分が名前で呼ばれてないとには突つ込まずに聞いてきた。

「まず、初めにお前はオレに『もう逃げられない』と言つたな。確かに、今オレは三方を不良に囲まれていいけど、ここがガラ空きだ」

オレは後ろにある壁を軽く叩きながら言つた。

「はあ？ 何言つてんだ、お前は」

全く意味がわからないという表情を浮かべた不良Aと取り巻きDもを無視して、話を続ける。

「そして、もう一つの間違いは……」

そう言つやこなや、オレは垂直な壁を走り出した。

「オレは無能力者じゃないんだよ」

じゅぱせんじや

## 第2話 「仲間たち」の世界（前書き）

キャラクターを少々作りすぎました。（上手く回せるか心配・・・）  
第2話です。

## 第2話 「仲間たち」の世界

翌朝、学校に行く途中で、オレは奏を見かけたので声をかけた。

「よつ、奏。怪我はもういいのか」

「ん？ああ、友人か。うん、まあね、そんなにひどくなかったし。それよりも、今回友人たちにはいろいろと迷惑かけたね」

「いつものことだ、気にしろよ」

「そこは『気にするな』と言うところじゃないの？」

「お前がオレを巻き込むことに気にしなくなったら、オレの体が持たん」

「うつ、ごめん。でも、大丈夫だつた？僕を助けた後で、山吹が携帯に電話したみたいだけど全然出なかつたから、何か大変な目にあつたんじゃないかなって心配してたよ」

「（その電話のせいで、オレは大変な目にあつたんだが、）まあ、大丈夫だつたぜ。これでも一応、お前と同じ能力者だからな」

あの後、悠々と壁を登り切り、反対側に渡つたオレは、不良どもから無事に逃げきることに成功した。

「にしても、奏。一体何があつたんだ？」

「どうせこいつのことだから、人助けだとは思うが。

「帰り道で、中学生くらいの女の子があいつらに襲われそうになつてるので見かけてね、その子を逃がせたまでは良かつたんだけど、あの炎を使う能力者に捕まっちゃつたんだよ。それで、僕を痛めつけても怒りは治まらなかつたみたいで、友達も痛めつけてやるうとあいつらは友人に電話をかけたんだ」

オレはあの不良どものむかつく言動を思い出しながら、あいつらならそれくらいのことはやりそうだなと思った。全く、酷い奴らだ。

「とかさ、お前も見境なく行動するなよ。この町には学生能力者警団だつているんだし、そこに連絡するだけでも良かっただろ」「<sup>キ</sup>学生能力者警団とは、能力者・無能力者の犯罪や暴動を、取り締まつたりする、能力者による警察の学生版で、定期的に町をパトロールしている。

「でも、<sup>キ</sup>学生能力者警団だつて完全に犯罪を未然に防げるわけじゃないでしょ。連絡してた間に怪我したら元も子もないし」「それは、そうだが……」

奏がかばつて、怪我したつて元も子もないと思つが。

「つーか、それならお前が<sup>キ</sup>学生能力者警団に入ればいいじゃねえか。そうすれば、お前もいろいろと都合がいいだろ」「僕は、あくまで一般人として自由に人を助けたいんだよ。義務とか規則とかじやなく」

「さいですか」

それはまた、殊勝な心掛けで。

「それに<sup>キ</sup>学生能力者警団は厳しい適性テストをくぐり抜けたエリート集団、僕なんかとは格が違つさ」

まあ、確かに<sup>キ</sup>学生能力者警団は毎年、数百人の志願者がありながら、合格者は十人、二十人くらいしかいない超倍率といわれている。

現にオレの通う学校にも何人かの能力者はいるが、**学生能力者警団**は一人もいない。

（でも、**学生能力者警団**と同等かそれ以上の実力者なら一人いるけどな）

オレは彼女のことを思い浮かべながらそう思った。

「それはそうと、今朝のニュースでやつてたんだけど、昨日の夜中に刑務所から囚人が集団脱走して、未だ行方知れずなんだって」  
「マジか！ それはまた、物騒だな。もしかしてそいつらって能力者か？」

「うん、能力でたくさんの人間の命を奪つた凶悪犯だつて、テレビで言つてたんだ。警察の捜査によると、**空間干渉系**の**IF**を使う人間が外部から手伝つたらしいんだって」

なるほど、**空間干渉系**か。

**IF**には大きく分けて3つの種類がある。

まず初めに、**物理干渉系**。これは物体の運動や、**性質**・**形態変化**、**自然現象**なんかに関わる能力で、代表的なのは**念動力**や**発火能力**。

次に**空間干渉系**。空間に関わる能力で、代表的なのは**瞬間移動**。

最後が**精神干渉系**。人や動物の思念（精神）・五感に関わる能力で、代表的なのは**念話**と、こんな感じで分けられている。

ちなみに、3つの中では**物理干渉系**の**IF**を持つ人間が一番多く、**空間干渉系**が一番少ない。

(割合にすると大体 物・精・空 = 6・3・1 となる)

「だけど、そんな危険な奴らなら能力者専用の刑務所に入れられて  
いるはずだろ。たとえ、高度な空間干渉系の能力者が手伝つても上  
手くいくとは思えないけど」

「だから、警察の方でも悩んでるみたいだよ。何せ、こんなことは  
前代未聞だからね」

そんな話をしながら、学校へ向かっていくと小学生くらいの女の子  
が一人、木を見上げておろおろしていた。当然、奏はその子をほつ  
とけるわけがなく話しかける。

「どうしたの。何か困ったことでもあったのかな。」

奏が優しく声をかけると、その子は恥ずかしそうにうつむきながら、  
答えた。

「あ、あのね、カナの帽子が風で……」

見ると、木の方の枝に黄色い学生帽が引っかかっている。  
かなり高い場所にあるつえに、木の幹は太く、道具もなしに登るの  
は無理そうだ。

「あれか。大丈夫だよ、カナちゃん。今すぐ取つてきてもらつから」

そういうと奏はそこらへんの電線にとまっているカラスを見つめた。  
すると、突然カラスが羽をばたかせて飛び、木の枝に引っかかっ  
てる帽子をくちばしでくわえて奏の手の中に持つてきた。  
奏はその帽子を笑顔で少女に渡す。

卷之三

「うん……ありがとう。お兄ちゃん」

カナという子はちょっと驚いていたようだが、帽子をとつてくれたことに感謝してお礼を言った。

「どういたしまして。 もへ、 風に飛ばされないように手に風をつけてね」  
「うん! 本当にありがと!」

カナちゃんは、奏から手渡された帽子をかぶりタツタツタツと走り出す。

「しかし、いつ見ても面白いな、お前の能力は」

去っていくその子が見えなくなつたときには、オレは口を開いた。

そう、これが、奏の能力・獣王。目で見た動物（脊椎動物のみ）と意識をつなぎ、五感を共有し操る精神干渉系のIF。奏はこの能力を使って、いろいろなトラブルが起こった場所を把握し、解決のために動いているのだ。

「その能力と心意気があれば、学生能力者警団にとつては貴重な存在になると俺は思うんだけどねえ」

全くもつて、残念だ。奏は努力家だから頑張ればイケるかもしけないのに、**学生能力者警団**に入ろうとしないなんて。

「で、本音は？」

「奏が学生能力者警団に入れれば、オレへの被害が減ると思ってな」「そんな事だろうと思つたよ」

オレたちは再び学校へと歩き始めた。

オレたちが通っている、夕波高校はどこにでもある普通の公立高校だ。

偏差値もとりわけ高いわけでも低いわけでもなく、強豪と呼ばれる部活動もない。

強いて特徴があるとすれば、入学時に全ての新入生に座右の銘とか目標とかを四字熟語で書かせることだろう。ちなみに、オレが書いたのは『他力本願』で、奏は『一日一善』だ。

オレたちが1・Aの教室に入ると、一人の男子生徒が話しかけてきた。

「よう、友人に奏。昨日は大丈夫だつたか？」

声をかけてきたのは、クラスメートの前原山吹。  
まえはらやまぶき。

つんつんと、とがつた髪の毛が目立つ、体育会系。明るく、竹を割つたような性格のため仲間が多く、いつも周りに人がいる。彼が書いた言葉は『全国制覇』で、サッカー部でレギュラーを目指して頑張っている。

「うん、もう大丈夫だよ。山吹にも迷惑かけたね」

「山吹、オレはお前が電話をかけたせいで酷い目にあつたぜ」

奏はすまなそうに言い、オレは文句を言う。さつきからの言動でも

わかるよつて、山吹は、オレと共に奏救出作戦に協力してくれた仲間である。

「やういえば、論道君の姿が見えないけど、今日は休み?」

「いや、今日の朝に上級生と何か戦りあつたらしくて、生活指導部の方に呼び出されたんだよ」

「やれやれ、またか」

鳴岡論道は目つきが鋭く、少し不良っぽい雰囲気をもつてゐるせいで、上級生によくからまれるオレたちのクラスメートだ。

まあ、根は悪い奴ではないんだが、周りからは結構恐れられている。でも、顔はかなりイケてる方で、恐そうなところがまたイイ!とかいう女子たちの間で、かなりもてる。その人気は奏とクラスいや、学年で一位一位を争うほど。(本ッ当にむかつく。)

彼が書いた言葉は『悠々自適』。論道らしい一言だな。

「やつか、論道君にも一言お礼を言つておきたかったんだけど。心配させちゃったからね」

奏が残念そうな顔をする。正直、論道はあんまり心配してないとオレは思うが。

「(ぼそつ)…………僕も心配した」

「ん? 奏何か言つたか?」

「いや何も言つてないけど…………」

おかしいな。今確かに、声が聞こえたよつた気がしたが。

「・・・・・僕」

あたりを見回すと、前髪で顔を半分隠した男子生徒がいつの間にかそこに立っていた。

「うわっ、びっくりした」

「いつからいたんだ？」

「いるならいるって言つて欲しいぞ」

奏、オレ、山吹は目の前にいる及川樂也にそれぞれ思い思いのこと

おいかわがくや

を口にする。

物静かで口数が少ないとか、あまり人といつしょにいるところを見たことがないとか、いろいろ理由は考えられるが、樂也は影が薄い、目立たないとかいうレベルじゃなくくらい存在感が無い。

故に、今みたいに本人にその気はないのだが、知らないうちに現れて、よくみんなに驚かれる。

そんな彼が書いた言葉は『暗中飛躍』。人に知られないように、ひそかに活躍するという意味が・・・まあ、ぴったりといえばぴたりだ。

「・・・・・・・・・みんな、いろいろひどい」

樂也はオレたちの言葉に落ち込んだようで、とぼとぼと自分の席に戻つて行くのを、慌てて追いかけて奏が慰める。よく見慣れた光景だ。つていうか、

「なあ、何で樂也まで昨日のこと知つてんだ？」

確かあいつには連絡してないはず、といふかそもそもオレは論道にだけ協力を頼んだはずだが。

そう思つて、オレは隣にいる山吹に聞いた。

「ああ、昨日お前が論道に連絡したとき、偶然その場にいたんだよ。山吹と同じくな」

「まあ、楽也は塾があつたせいで来れなかつたけど、かなり心配してたぞ」

「ふうん、そうかそうか。だから連絡してない山吹まであそこに来たのか」

「そういうこと。それにしても水臭いぞ、友人。何で奏を助けるのに俺を呼ばなかつたんだよ」

「だつて、山吹は無能力者いっぽんじんだろ。実際、いてもいなくともそんなに変わらなかつたしな。」

「そう、このクラスにいる能力者はオレ、奏、論道、楽也の4人だけだ。だ。

「酷つ！ いくらなんでもそういうこと普通ストレートに言つか！」

「事実だろ」

「う、・・・・・チクショウ！ 何でおれだけ能力が無いんだあ！」

山吹はそう嘆きながら、廊下に出て走つていつた。（もうすぐ、H Rが始まるというのに。）

オレは自分の席に着きながら、先生が来るまで一眠りすることにした。あ、今日も平和だな。

さて、四時間目の授業も終わり昼休みになつたので、オレと奏は

一緒に屋上へと向かった。

屋上は基本的に解放されているが、利用者が少ないので静かなところが、オレは気に入っている。

ちなみに、山吹は部活の仲間となので今日は一緒にではない。晴れ渡った春の空の下、オレは持ってきた弁当を広げた。

「あれ？ 奏、お前は今日、購買でパンを買ひにやなかつたか」

奏の両親は共働きなので、週のうち何回かは購買で昼飯を買ひはまつたが、今日は弁当を持ってきている。

「ああ、これは数日前に助けた女の子がお礼につて作つてくれたんだよ」

奏よ、お前はどんなだけトラブル解決しまくつてるんだ。

「やうひか、それは良かつたな」

けつ、奏はそうやつて……

「…………また女子とのフリガを成立させたいぐ

そうそう。ん？

「楽也ーーいつの間に来たんだ？」

「…………君たちが来る前からいたマジか！ 例によつて、全く気付かなかつた。

「しかし、珍しいね。楽やはいつも教室で食べるのに

奏が海老フライを口にしながら、樂也に話しかける。

「…………なんとなく屋上で食べたい時もある

ああ、左様で。

「確かにその気持ちはわかる。」<sup>ヒ</sup>は口当たり良好、風通しも良く、  
とても静かで人が少ない。この学校でここ以上にくつろげる場所は  
無いと言つても過言ではないな」

突然、一人の二十代くらいの若い男性が屋上について語りだした。  
(つていうか、この男性もいつの間に来たんだ?)

「…………」

「センセー、そんなに熱く語るほど、ここに来たがってたわけじゃ  
ないんですが、つと  
楽也は思つてますよ」

「十秋、わざわざ説明しなくても…………」

「いやあ、かくいう先生も学生の頃はよく『ヒ』で…………」

「…………聞いてない」

「そだな」

「うん」

誰も聞いていないのに一人で勝手に話を進めているこの無駄に熱い  
人は、俺たちのクラス1-Aの担任の田端先生。<sup>たばた</sup>

教師になつてまだ3年という新人の先生で、今じきめずらしい熱血漢。若いといふこともあってか、生徒には親しみやすいと評判ではある。

だが、時々こうやつて一人でいきなり昔のこと話をし始めるところに困っている生徒が多い。

「つと、話は変わるが鏡音、七橋、及川」

先生は急に真面目な顔をして、オレたちの名前を呼んだ。

「もう知つてるかもしないが、昨夜に刑務所から集団脱走つて、未だ囚人の一人も捕まつていない。それどころか、足取りさえもつかめていない。その刑務所付近の町々は危険な状況下にあるので、住民に注意するようにと警告が出された。ここも、距離としてはそう遠くない場所にあるし、囚人が潜んでる可能性も〇じやないから、しばらくは警戒態勢が続くだろつ。お前たちも十分気をつけるんだぞ。詳しいことは明日の緊急朝礼で校長先生が話すからな」

先生は、よく言い聞かせるようにオレたちに話した。  
確かに、この辺に脱獄囚が潜んでるのなら、警告するのは当然だろう。だが、

「先生」

「ん、何だ？ 鏡音」

「明日話すなら、どうして今、わざわざ言つんですか？」

「わからないのか、お前たちはこの学校きつてのトラブルメーカーだからな、危ない目に会つ前に釘を刺しておきたかったんだよ」

「それは少し心外ですねー。オレはトラブルに向かつて行つてゐるではなく、トラブルの方からこっちに向かつてくるんですよ」

トラブルメーカーなのは奏だけで、オレはただ巻き込まれているだけだつと言いたい。

「まあ、でも用心するのに越したことはないだろ。じぱらくは氣を付けるよ！」

そう言つて、先生は屋上から出て行つた。

「やれやれ、何とも物騒なことだな」

「…………これからはあまり外に出ない方がいいかも」

「そうだね。」

オレたちは弁当を食べ終え、教室に戻る途中で屋上で先生に言われたことを思い出していた。

まさか、奏の言つてた脱獄囚がこの辺にいるかもしけないなんて、物騒極まりないな。

おそらくこれからは、町の人たちにとつては不安な日々が続くだろう。

そんなことを考えながら廊下の角を曲がるうとすると、突然、ものすごい勢いのある水流が人を押し飛ばしてるのが、目に入ってきた。その飛ばされた人は壁に体を強く打ちつけて、そのままぐつたりと動かなくなつた。

「はあ、いくら何でもやりすぎなんじゃないですか。会長。」

オレが、水が飛んできた方向に目をやると、そこにすりつと背の

高い、凛とした空気を纏わせている女性、辻志季先輩がいた。

2年ながら、夕波高校の生徒会長に就任した、成績優秀、容姿端麗、運動神経もよく、IFも学生能力者<sup>キ</sup><sub>ブ</sub>警団のトップに匹敵する実力を持つた完璧人間。

故に、非公式の巨大なファンクラブもあるといつ噂もあるほど、男女問わずに人気がある。

うちのような平凡な高校にいるのが、とてもなく不思議な人だ。

「ん、ゆーじんか。よく私だと氣付いたな。」

そりや、氣付くわ。廊下で人に向かってIF使つのは、会長くらいだからな。

てか、そのあだ名いい加減やめい。

樂也が伸びている男に駆け寄つて、大丈夫ですか、と声をかけていた。

「で、話を戻しますけど、やりすぎです会長。この人氣絶してるじゃないですか」

「仕方ないだろ、この男が私に無礼な真似を働くこととしたんだ。これくらい正当防衛の範囲内だ。」

辻先輩

そこで伸びてる男を指さしながら、会長はさも当然といった感じで言ひきつた。

(いや、この男が会長に何しようとしたかは知らないが、明らかに無能力者には強すぎるだろ)

横にいる一人も、どうやら俺と同じことを思つてゐるようで、顔が

引きつっている。（といっても、樂也の表情はわかりにくいか）

「えっと、辻先輩。とりあえずこの人を保健室に運びませんか？先輩の EIF をまともに受けて、結構なダメージを負っていますし」

奏が、遠慮がちに提案する。

確かに会長の EIF 、リキッドフットロール液体操作をくらつたら……ヤバいな。

「うむ、それもそうだな。じゃあ、こいつを運ぶとするか。」

そう言って、会長は伸びている男の襟をつかみ、ずるずると引かずつていた。

「…………なんつーか、相変わらずだな。会長は」「…………中学の時からまるで變つて無い」「ハハハ…………そうだね」「

オレたちは、あらゆる意味で凄い怪…………もとて会長とこいつ存在を再認識したのだつた。

### 第3話 「彼女との出会い」の世界

まだ青さの残る空の下、オレは帰路に就いていた。基本、オレは帰りは一人。

奏と山吹は部活があるし、論道は…………仲間と言えるのか微妙なとこ。

で、オレは今、一人で帰っていたのだが…………

「退けつ！邪魔だ！」

怒鳴り声とともに、オレは後ろからやつてきた黒い服に一ツト帽をかぶった男に突き飛ばされた。

突然の出来事に、オレはその力に抗えず地面に倒れた。

「イテテ、何だつたんだ、一体？」

オレが起き上るのと同時に、一人の少女がオレの目の前を走り去つていった。

「待ちなさい！その男」

そういうと彼女は、手の平を地面に押し当てる。

すると、瞬く間にそこから地面が凍りだし、さつきの男はその凍つた地面に足を滑らせて派手に転んだ。

「<sup>キ</sup>学生能力者警団から、そう簡単に逃げられると思わないことね。さあ、おとなしく捕まりなさい」

威圧的に彼女は言つと、その男の反応を待つた。普通に考えれば男

の方が断然不利だが、

「へつ、そんなに簡単捕まつてたまるかよ」

男は反抗的にそう言つた。それは、虚勢ではなく確かな自信をもつた響きを含んでいた。

「は？ 何を言つてるの？」

不思議そうな顔をする彼女の前で、その男はにやりと笑うと、一瞬で姿が消えた。

「つ！ しまつた、逃げられた。まさか奴が瞬間移動の能力者だつたとは」

迂闊だつたつと彼女は、がつくりと頃垂れた後、犯人を取り逃がして悔しさから電柱に拳を打ち込み始めた。

（やれやれ、何かめんどい場面に出くわしちまつたなあ）

いつもなら、面倒事は避けるオレだが、目の前で起こつてしまつた以上、見過ごす訳にもいかない。（これは奏の影響か）オレは未だ蹴りを入れてる彼女を尻目に、ポケットから携帯を出した。

今、自分が考へてゐる仮説を裏付けるために。

（クツクツクツ、思つた通りあの学生能力者警団の女は俺が瞬間移動で逃げたと思つてゐる。しかし、何とか上手く騙せたはいいが、

キーフォード・ガード

テレポート

地面が未だ凍つてゐるせいで、走つて逃げ出せないのがつらくな

男はもどかしく思いながらも、ゆっくりとした足取りで現場から離れていく。

（もひ、この辺りは学生能力者警団<sup>キーブ・ガード</sup>が警戒するから、商売はしばら  
く休まざるをえんな。まあ、ほどぼりが冷めたら、また再開できる  
しな）

そんなことを考えながら歩いていると、男は突然後ろから強い衝撃を受けた。

（な、何だ！）

そのまま凍つた地面に激突した男が振り向くとそこには、さつき逃げるときに突き飛ばした中学生くらいの少年が携帯をもつて、立っていた。

（バカな…まさかこいつ俺の能力を…・・・・・）

男が目をやると、その少年は満足げに頷いた。

目の前で、何も無い場所を携帯の画面越しに見ながらオレは、自分の読みが当たつていたと確信した。

そもそも、奴を瞬間移動の能力者と考えるには少々不自然な点がある。

瞬間移動<sup>テレポート</sup>が使えるのであれば、どうして追いつめられるまで使わなかつたのか。最初から使えればもつと楽に逃げられたはずだ。つまり、奴の能力は瞬間移動ではなく不可視、つまり見えなくなる精神干渉系のIF能力ではないか、とオレは考えた。

仕組みさえ分かつてしまえば、あとはこいつのもの。

精神干渉系の能力は機械には通じない。

故にオレは、携帯のカメラ機能を使い、奴を画面越しに見て、その位置を把握したのだ。

（おそらく、奴が最初から能力を使わなかつたのもこいつの理由だらう）

奴がやつてきた方向は大通り、人も交通量も多く、監視カメラもある。

そんな所で能力を使つても逃げるのは容易ではないし、本当の能力がばれる恐れもある。

だから、ここに来るまで使わなかつたのだろう。

（まあ、結果的に捕まっちゃった意味ないんだがな）

オレを突き飛ばしたのが運の尽き。潔く捕まりな、名も知らぬ男よ。

「くっ、まさか俺の錯覚景色<sup>ミスティックビュー</sup>が見破られるとは・・・」

「さあ、能力もばれたことだし、おとなしく捕まりなさい」

いつの間にか学生能力者<sup>キーフ</sup>警団<sup>ガード</sup>の彼女が、加わっていた。

「だが、俺の能力はこんなもんじゃないぜ」

「そう言つと、男は錯覚景色を解き姿を現した。

「ばれちまつたんならしじょうがねえ、俺の真の能力を見せてやる」

「そういうやになや、周りの景色が回り始めた。

「俺の錯覚景色は人の視覚に作用して、異なる景色を見せる能力。それを応用すればこんなこともできる。まあ、いつまで耐えられるかな」

男は得意げな顔をして話している間にも、景色はビンビン回つてこき今自分がいる場所すら分からなくなつてきた。

「うえ、何か気持ち悪い」

彼女はもつすでに立つてゐる」とすら不可能なよつて、その場に手をついて倒れてしまつた。

（まあ、そつなるわな。こんなの見せられちゃあ平衡感覚がおかしくなるのが普通だ）

やつ、普通なう。

「ハツハツハ、学生能力者警団の女はもうダメみたいだが、お前は中々粘るじゃないか」

余裕たつぱりといった調子でオレを見る態度から察するに、おそらく

く奴はこの技、螺旋景色（勝手に命名）を破られたことが無いのだ  
らう。

（だが、その油断が命取りだ）

オレは携帯の画面を見ながら、一直線に突っ込んだ。

## 第4話 「友人の能力」の世界

「な、何でお前は……」

男は驚いた顔をして、こっちを見ている。

今のオレは奴からして見れば、かなり奇妙に見えたかもしれない。いくら携帯の画面で確かなのが見えているとしても、もはや上下左右が全く分からぬ程ぐぢやぐぢやな景色の上に、足元の地面は凍つていて滑りやすい。

そんな状態で、ターゲット標的に向かつてまつすぐ走れるなんてことはいっぽん無能力者には不可能なことだからな。

「くっ……」

男は自分の能力が効かないと分かると、一目散に逃げ出した。まあ、当然の反応だが……

つるつ、ゴーン。凍つた地面の上を勢いよく走つたせいで男はもう一度盛大にこけて、地面に後頭部をぶつけた。

しかも今回は当りどころが悪かったらしく、そのまま気絶してしまつた。（敵とはいえ、この結末には同情する。あまりにも哀れだ）

「しつかし、結果的には助かつたな」

実は、勢いよく突つ込んだのはいいが、その後どうするかは全く考えてなかつたのだ。

自慢ではないが、元々オレは喧嘩にはからつをし自信が無い。

ま、『終わりよければすべてよし』というし、気にしないでおこう。

「さつてと・・・・・大丈夫か」

オレは、未だ気分が悪そうな彼女に話しかける。

「大丈夫・・・じゃない。まだ気持ち悪いわ」

彼女は口に手を当てて、よろよろと起き上った。

今まで、奴のほうにばかりに注意を向けてて気づかなかつたが、彼女は結構、美人といえる顔立ちをしている。（今は気分悪そうな表情のせいで、美人には見えにくいや）

「・・・というか・・何でアンタは・・平氣なのよ。凍つた・・地面を・・滑らずに・・走つてたし」

彼女は一言話すのもつらそうな感じで言つた。

「アンタじやない、鏡音友人だ。まあ、何で平氣かといふとそれはオレのIF能力が関係しているわけだ が・・・」

オレは自分の能力について説明を始めた。

「オレの能力は摩擦力<sup>ブレーキ</sup>といつて、摩擦力を増減する能力だ」

「摩擦・・・力？」

「そう、凍つた地面や油を塗つた床が滑りやすいのは知つてるよな。あれは物理学の世界では摩擦が少 ないといつんだ。つまり、摩擦を上げてやれば凍つた地面の上でも滑らずに走れる。さうして摩擦を上げれば壁を走り登ることもできる」

オレが昨日、不良に襲われたときに逃げれたのもこの能力のおかげ

だ。

「なるほど、だからアンタ、じゃなくて鏡音は滑らかにあいつのと  
こまでいけたのね。だけど、その摩擦力<sup>ブレーキ</sup>という能力があると、ど  
うしてあの景色を見て気持ち悪くならなくなるのよ」

少し気分が良くなつたのか、彼女はさつきよつもスラスラと喋る。

「さつきも言つたと思うが、オレは長年この能力を使って壁とかを  
歩いていた。その影響か三半規管が異常に強くなつて、平衡感覚  
が体操選手並みかそれ以上になつたというわけだ」

あの景色を見続けると、平衡感覚がおかしくなつて車酔いに似  
た症状が引き起こされる。

だが、人よりも強い三半規管を持つてるオレにはそんなのは効かな  
いといつことや。

「へ～なるほつ」

うふつと彼女はまた気分悪そうな表情となつた。（調子に乗つて喋  
りすがるからだ）

「あ～今更でなんだが」

オレは彼女に気まずそうな声で言つ。

「な・・・・・何？」

「そんなに気持ち悪かつたんなら、田を閉じとおやしくかつたんじや  
ないのか」

「・・・・・・・・・」

「あ～えっと」

「……………もつと

「は～？」

「もつと早く言え！」

そう言われた後、物凄い勢いで正面から蹴りを入れられた……。  
・理不尽だ。

その後、何分かして氣持ち悪さから完全に回復した彼女は、呼び出した仲間の学生能力者警団と共に、男を連行した。

聞くところによるとこの男（名前は山田公一という）は、能力を使って万引きなどを行い、その盗んだ品物を別の場所で売りさばいていたらしい。

「しつかし、あの女め、本氣で蹴りやがって」

まだ、若干痛む腹を押さえながらオレは、名前の知らない学生能力者警団の女を恨みながらオレは自分の家に着いた。全く、今日は散々な日だ。

自分の部屋に行って、ベッドに横たわった時、家の電話が鳴りだした。

（何か嫌な予感がする）

そう思つたが出ないわけにもいかないので、オレは泣々受話器を取る。

「はい、もしもーし」

「ああ、友人」

「奏か、何か用か?」

「うん、実は・・」

「断る」

「ちょっと頼みたい」とが、つて早いよ!まだ僕何も言つてないじ  
ゃん!」

「ああ、悪い悪い。何か嫌な予感がしたもん」

「もう」

「で、頼みたいことつて?」

「うん、実はね週末に、ちょっと買い物に付き合つて欲しいんだけ  
ど」

「何だ、そんなことか。別にいいけど、どうせ暇だし」

「ありがとう。じゃあ、待ち合わせの場所と時間はおいおい伝える  
よ」

そう言つて、電話が切れた。だが、平凡な用事で会つたのにも関わ  
らず、何故か嫌な予感が一層強まつたような気がした。

## 第4話 「友人の能力」の世界（後書き）

やつと主人公の能力が説明されました。しかし作者である自分が言うのもなんですが地味です。

## 第5話 「会長ｖｓ転校生」の世界

あの事件から3日後、オレが学校に来てみるとD組にかわいい女子の転校生がやつてくるという話がクラスで飛び交っていた。

ま、小学生じゃあるまいし自分のクラスでない（あ、ちなみにオレらがいるのはA組）ことにオレは別段興味はないが、オレ以外のクラスメート（特に男子）はかなり興味があるようで、休み時間はその転校生の噂でもちきりだった。

「なあ、友人。ちょっと見に行かねえか」

退屈な授業がやっと終わった昼下がりに、オレは山吹にそう誘われた。

「見に行くな、転校生をか？」

「そうそう、D組じゃあ大騒ぎしてるぜ。転校生の名前は片梨結つて言つて、なんとあの学生能力者警団に所属してるんだよ」

「へ～そりなんだ」

そりやすげえな。

「な、だから見に行くなぜ」

「いやいいよ」

興味無いしね。

「ん～どうか。全くお前はいつもそうだよな。自分に関係ないことは関心が0というか」

余計なお世話だ。

「じゃあ、俺は見てくるから。もちろん、後でばっちり報告しつくから」

そう言って山吹は、教室を飛び出していった。

（別にしなくてもいいんだけどなあ）

やれやれ、と思いながらオレは昼飯を食べるために、いつものように奏と楽也に連られて屋上へ行つた。しかし、そこではいつもと違う光景が目に入つてきた。

屋上の真ん中で一人の少女が対峙してしている。

ここに入学してからほぼ毎日来ている、屋上の常連であるオレたちもこんな場面は見たことが無い。

といふか、ここにはオレたち以外あまり人が来ないんだけどね。

良く見てみると、一人の少女のうち一人はオレらがよく知っている会長、辻先輩で、もう一人は山田公一の逮捕の時に出会つた名も知らない学生能力者警団の彼女（ていうかウチの生徒だったのか）だった。

「なあ、一体何が起つてんだ？」

オレは全く状況が理解できないので、隣にいた奏に聞いてみた。

「ちょっと待つて」

奏はそう言つと、近くにいた鳩に能力をかけた。

奏の獣王は対象とした動物の記憶まで知ることが可能なのだ。

「えつと、なんでも今田転校してきた彼女が学生能力者警団の人間で、そこで度々ウチの会長のことを耳にしていたらしく、実力が知りたいって言つて、今決闘を申し込むところなんだって」

決闘つて、いつの時代だ。つーか、あいつが転校生だったのかよ。オレたちは、弁当を広げながらこの決闘の行く末を観戦することにした。

「なあ、ただ見てるのも何だしどっちが勝つか賭けねえか」「いいよ」

「・・・・・・・・同じく」

「んじゃあ、オレは会長が勝つ方に百円な

「僕もそれで」

「・・・・・・・・右に同じ」

「それじゃあ、賭けが成立しないでしょ！…」

いつの間にか目の前にいた彼女にオレたちは盛大にツッコまれた。

「つて、アンタはあの時の！」

「だからアンタじゃなくて鏡音友人」

てか、今気付いたんかい。

「なんだ、片梨はゆーじんの友人だったのか？」

会長も話に加わってきた。といつが会長、それは洒落のつもりなんか、だとしたら全然面白くないぞ。そして、ゆーじんと言ひのはやめろ。

「いやいや、友人じゃないですよ。そもそも、オレは理不尽な暴行を加える人間との縁なんて欲しくないです」

冗談じゃないとオレは即座に否定する。

「あの時の」と、まだ根に持つてゐるの

片梨が、ジト目で睨んできた。当然だろ、オレは最低でも一ヶ月は根に持つ男だからな。

「『めん』めん。静かにしてるから、続けていいよ」

奏が険悪になりそうな雰囲気を察して、早々に言い合いを切り上げようとした。

「つたぐ、そもそもアンタたちは私が勝つとは思わないの？」

「無いね」

「ごめん、無いと思ひ」

「・・・・・・・・・右に同じ」

「何でそつキッパリ言い切れるのよ？」

片梨が不思議そうに聞いてきた。ふつ、愚問だね。そんなの決まつてるじゃないか。

「だつて会長だし」

「会長だもんね」

「…………会長だから」

「答えになつてない！何？その会長方程式！――」

片梨は、わけ分かんないと声を張り上げた。なんで分かんないのかな

「あ～転校生。そもそも決闘を始めたいのだが……」

「えつ、あつ、すいません」

言ひ合ひに夢中になつていた片梨は注意されてよひやく我に返り、いそいそと元の場所に戻つていつた。

「すいません、じつちの都合で決闘を受けでもうつたのに迷惑をかけてしまつて」

「気にするな、最近は私に挑戦するような骨のある奴がいなくて、退屈していたところだ。迷惑どころか、むしろお礼を言いたい気分だよ」

会長は鷹揚と嬉しそうに返事をした。

「では、行きます。辻先輩」

「私を楽しませてくれよ、転校生」

戦いの火ぶたが、切つて落とされた。



## 第5話 「会長ｖｓ転校生」の世界（後書き）

奏：「ところで友人、彼のこと知ってるの？」

友人：「いや、まあ、知ってるといえば知つてることになるな」

奏：「へ～友人に<sup>キ</sup><sub>フ</sub>学生能力者警団の知り合いがいたなんて、知らなかつたなあ」

楽也：「…………何とも意外」

友人：「いや、知り合いつてほどでもないんだが……」

片梨「もう一観戦するなら静かに見ててよね」

## 第6話 「決着」の世界（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

## 第6話 「決着」の世界

「では、これから行かせてもらひ」

吉つや和や会長の周りに大量の水が出始め、空中を漂っていた。  
相変わらず会長の液体操作リキッドコントロールはいつ見てもすげえな。

周りに出てきた大量の水は、強い水流となつて一直線に片梨に向かつて行つた。

容赦ない一撃で吹つ飛ばされるかと思ったが、片梨は瞬時に両手を下につけると、瞬く間に氷の壁が生み出されて水流から身を守つた。しかもそれだけでなく、会長の操る水流まで凍りつかせていたので、いつたん会長は攻撃をやめ、距離を取つた。

「ほう、中々やるじゃないか」

「先輩の方こそ」

二人は互いに、にやりと笑つた。

「へ～さすが学生能力者警団。<sup>キーフォード</sup>あの会長とともに戦えてるよ」  
「・・・・・・・・結構すごい」

奏と楽也は片梨の実力を目の当たりにして、少し驚いている。まあ、実力はだてじやなかつたというわけか。

「会長のエフは、片梨さんのエフとは相性が悪そうだね」

「…………苦戦するかも」

確かに、水を操る会長に氷使いの相手は厳しいようだけれど見えるが、

「果たしてそうかな」

オレは、会長が苦戦するとは思えなかつた。

片梨は、次々と氷柱ひょうちくを凍らせた床から生み出して、会長を追い詰めていつた。

会長は氷柱ひょうちくを避けつつ、水の弾丸を放つて反撃してくるが、片梨は氷の壁でそれを阻む。さらに、会長が攻撃に使つた水から片梨は新たな氷を生み出し続けている。

(いける、今の私なら先輩を倒せる)

片梨は会長と直接の面識おもてしがあつたわけではない。

しかし、学生能力者オーブ・ガード警団内で先輩に当たる兄が度々口にするその名前は、新人であつた片梨に“すごい人”という印象を与える、いつしか彼女の目標となつていた。

そして、いつかその人を乗り越えるためにと努力を重ねてきたのだつた。

(あいつらは私が勝てないと思ってるようだけど、何も分かつてないわね。戦いはIFの強さよりもむしろ相性の方が重要なのよ。先輩のIFでは私のIF・氷結能力フリーズ・スキルには勝てない)

**氷結能力**、それは -100 の冷氣を操り、触れたものを瞬時に凍らせる物理干涉系の I.F.。液体を操る液体操作には、まさにうつつけの能力である。

「よし、このまま攻め続けていけば勝てる！」

さらに、スピードを上げて会長を追い詰めていく片梨。だが、会長はこの圧倒的不利な状況で……笑っていた。

（この状況で……笑っている？）

それは、不敵な笑みとでもいえばいいのだろうか。相手の力を見極めるため、わざと互角に戦つてのような印象を受ける余裕のある表情。

（ま、まさか、会長は最初から……）

・・・・・最初から手加減していた！！

考えこむことで作つてしまつた一瞬の隙、その一瞬の隙を会長は見逃さなかつた。

氷柱をぐぐり抜け、片梨に向かつて一気に大きな水流を放つ。

（しまつた！）

完全に不意を突かれてしまい、氷の盾を作る時間は無い。

だが、彼女も学生能力者警団の人間。

咄嗟の事態にも素早く対応する能力をもつてゐるため、会長が放つた水流をそのまま凍らせようと両手を突き出しだが、

(凍ら・・・・ない!)

水流は何故か全く凍ることなく片梨の体を吹き飛ばし、壁に打ち付けた。

「おめでた！」

その一言を最後に、片梨は動かなくなつた。勝敗が決した瞬間だつた。

「ふむ、中々楽しかつたぞ。これからも頑張つて腕を磨けよ、転校生」

会長は久しぶりに手ごたえのある決闘ができたせいか、生き生きとした表情をしている。

「それじゃあ、私は用事があるから」これにて失礼する」

会長はスタッフと屋上から去つていき、残されたオレたちは無事を確かめるために、とりあえず片梨のもとへ向かつた。

「おーい、生きてるかー」

- . . . . . . . . . .

「どうやら死のようだ」

「誰が屍よーー！」

大きな声でツツ「ミ」を入れたため、『ほつほつとむせかえる、片梨。

「良かった、思ったよりも大丈夫そうだね」「当たり前、こんなで死ぬようじゃ学生能力者警団はやつていけないわよ」

どうやら、いつもの調子に戻ったようだ。シンシンした言い方に変わってる。

「でも、悔しいな。結構、自信があつたんだけど」「まだ腕が未熟だつたといつ」とセ「もう、その言い方むかつく」

再び険悪なムードになつてきたが、決闘で疲れ果てているのか前よりも強くは無かつた。

「まあまあ、落ち着いて。あ、そういうえばまだ自己紹介してなかつたね。僕は七橋奏、でこつちにいるのが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・及川楽也」

「あ、私は学生能力者警団星枝市支部所属の片梨結、今更だけどよろしく」

「ハハハハ」「・・・・・・・・・・・・・・よろしく」

さて、一通り挨拶も済んだことだし、

「奏」

「ん、何？」

「そろそろ飯食わねえか

めちゃくちゃ腹減ってんだけだ。

## 第7話 「能力」の世界（前書き）

この話だけだとさみしいので、もう一つサブタイトルをつけることにしました。

オレたち4人は今、それぞれの昼飯を食べながら雑談に花を咲かせていた。

「へゝ片梨さんは学生能力者警団星枝市支部のリーダーの妹さんなんだ」

「うん、いつかは姉さんを超える能力者になるのが私の目標なんだ」「でも、会長にあそこまでやられてちゃ、まだまだ先の話になりそうだな」「うだな

それぞれが、思い思いのじとを口にしながら話は弾んでいく。

「は～あ、結構自信あつたのになあ。それにしても何で最後の水流は凍りつかなかつたんだろう?」

「……………それは謎」

3人とも首をひねっている。やれやれ、分かつて無かつたのか。

「あれは、会長の能力だよ」

――会長（先輩）の能力？――

3人は驚いたようにこつちを見てきた。

「ああ、そういう片梨はともかく、奏と樂も知らなかつたんだつたな」

「いや、知らなかつたつて」

「…………一体どうこいつだとへ。」

「先輩はエフを2つ持つてるとどもこいつの」

そんなわけない。エフ能力は1人につき一つと決まっているからな。これ常識。

「そりじゃなくてさ、会長の能力ってどんなのが知ってるか」「今さら何を言つてるんだよ？会長のエフ・液体操作は液体を自由に操る能力でしょ」

奏の答えに、他の二人もうううんと頷く。

「確かにそりだが、その答えじゃ半分しか正解してない」

「……………半分？」

「じゃあ、もう半分は何よ」

「ああ、それはな…………」

オレは、彼らに説明する。

「会長の液体操作リキッドコントロールは液体の動きだけじゃなくて、性質も操れるのさ」

「「「性質！-！」」

よくハモるな、こいつら。

「そり、性質。おそれらく会長は生み出した水を、凍りにくいアルコールに変えて水流を放つたんだ」

「でも、私の氷結能力は-100フリーズスキル」の冷気を操つて凍らせるエフ。いくり凍りにくくたつて」

「純アルコールの氷点は-114、凍りつくはずがない」

オレの言葉に片梨はぐつ、と黙り込んだ。

「……………相変わらず知らなくてもこ ciòうな知識だけはある」

「本当、雑学に関しては一流だよね」

なんか何気なく貶されてるようを感じるのは、『氣のせこだらつか』が。

キーン／ーン／カーン／ーン……昼休み終了の鐘の音が響き渡った。

「あ、やっぱ、早く戻んねえと午後の授業に遅れちまつ」

「確か5時間目授業は体育だつたよね」

「……………着替える時間が必要、急がなきや」

「あ、じゃあ、また今度ね」

オレたちは、自分の弁当を片づけて屋上を後にした。

5時間目に体育の授業とは、何かとつらいものがある。食べた後にすぐ、運動するのがあまり気分のいいものでないし、体にだつていはずがない。

「もつこいつのこと、5時間目に体育の授業はしないと法律で決めらるべかだと思わないか。」

「いや、僕に聞かれても・・・」

少し困った感じの声で奏は返してきた。

今日の体育はサッカーで、2クラス合同で前後半の試合をしている。オレと奏は後半組なので、前半組の試合をのんびり観戦中なわけだ。ちなみに、この試合には負けた方のクラスが後片付けを全てやるとペナルティー付きである。

「いや～しかし、サッカーとなると輝いてるよな、山吹は  
「サッカー部の期待の新星だもんね」

校庭にラインを引いたサッカー コートの中で、山吹はドリブルで次々敵をかわし、華麗にシュートを何発もゴールに決めていた。

相手のチームにも何人かのサッカー部員はいるはずなのだが、まるで相手になつていない。

得点が6対0になつたところで、さすがにこれ以上は一方的になりすぎで、まずいと思ったのか先生は山吹に交代の指示を出した。

「やべつ、ちょっとやりすぎちまつたかな」

そう言って山吹はベンチに戻つていった。いや、ちょっとびっくりやねえよ。

山吹の代わりとして他の後半組が出ることになつたが、こんだけ圧倒的にリードしてなんなら、もう何もしなくとも勝てるなとオレは思

つていた。

だが、

「オイオイなんだよ、この試合展開は」

山吹が交代するまでは6対0だったのに、前半が終わるころになると6対4と2点差にまで詰め寄られていた。

（どんだけ山吹一人の存在がでかかったんだ、このチームは）

確実にチームバランスがおかしいと思いながら、オレは後半戦に入る前に作戦会議が必要だと感じた。

さて、後半の試合が始まった。オレのポジションはGK。<sup>ゴールキーパー</sup>これは山吹の推薦により決まったものだ。

最初に山吹が、

「GKは友人にするべきだ」  
<sup>ゴールキーパー</sup>

と言ったときは、周りから非難の嵐だったし、オレ自身も少し買いつ

被り過ぎじゃないかなあと思つたが、次の

「攻撃側は運動のできる人間を少しでも多くした方がいい」

といつ言葉でみんな納得した。ハハハ・・・・山吹イイイイー！！

そんなわけで、オレは（不名誉なことに）GKゴールキーパーを任せている。まあ、山吹の作戦のおかげか、前半よりは良い五分五分の試合となつているし、良しとするか。

（「ハーフは2点もリードしてるし、こりゃオレの出番はないかもな）

上手くいけば、突っ立てるだけで試合が勝ちで終わるかもしれない、とオレが思い始めたとき、

「鏡音、行つたぞ！」

味方の声が聞こえてくると同時に、いきなり前に飛び出してきた敵の一人は、デイフェンスラインを次々突破し、ゴール前までやつてきた。

（ん？ここは）

近くまでやつて来た敵の顔に、オレは見覚えがあつた。確か名前は・・・・・つと、そんなことを考えてる場合じゃない。

その敵は強くボールを蹴つた。オレの少し横に向かつて、一直線にボールは進んでいく。

オレはそんなに早いとは感じず、これなら止められると思い手を伸ばしたが、

「えつ？」

気付いた時には、目の前にボールはなく、すでにオレの後ろのゴルネットに入っていた。

「は～あ～あ～」

何で「こんな」とになつたのかと、オレは校庭の端でため息をついた。

「何、盛大なため息ついているんだ、友人」

幸せが逃げるぞ、と山吹はせつせとボールを拾つてゐる。

「友人、ボーッとしてないで早く片付けよう」

「…………終わつたこと嘆いても仕方がない」

「はいはい、わかつてますよ。」

奏と楽也に注意され、オレは片付けを再開する。

結果から言おう。オレたちは、負けた。

あの後、続けてゴールを2本取られ、6対7で逆転された。

だが、こっちのチームも負けじと攻撃に徹し、何とか試合終了までにゴールを一本取つたので7対7の引き分けとなり、勝敗は各チームのリーダーによるじゃんけんに託された。

で、そのじゃんけんに負けた山吹率いるオレたちA組全員は只今、後片付けの真っ最中というわけだ。

「でも、山吹ならあそこでバシッと勝ちを決めて欲しかつたね」  
リーダー

「オイ、運任せの勝負にリーダーかどうかは関係ないだろ！そもそも、友人がちゃんとゴールを守つてくれたら、じゃんけんなんてすることも無かつたんだぜ」

「失敬なーちゃんとオレはゴールを守らうとしたぞ。止められなか

つたのにはちゃんと理由があんだよ

そう、断じて言い訳などではなく、ちゃんとした理由があるのだ。

「へ～何だよ、その理由つて」

山吹が疑わしい目で聞いてきた。――100%嘘だと思っているな。

「後半3本のシユートを決めたのは全部同じ奴だったる。そいつは能力者だつたんだよ」

「えつ！マジで」

「それ、本当なの、友人」

「………………言い訳じゃないの」

「事実だよ」

「マジだし、本当だし、言い訳でもない。大体、サッカー部でもない人間が3連続得点を決めることが普通に考えればおかしいことだ。」

「昔、あいつが能力を使つてるのを一度見たことがあつてな」

確か名前は、矢木とか言ったかな。あのメンバーの一人だったけど、もう2年も前のことだから、顔を見てもすぐにはピンと来なかつたな。

「で、一体どんな能力なんだ？」

「能力名は反応鈍化。<sup>スローモーション</sup>対象とした人の反応速度を下げる精神干渉系のIFだ」

オレが気付くと、ボールがゴールに入っていたのは、ボールが速くなっていたのではなく、自分の反応速度を下げるはいて速くなつたように感じていたから。

「これじゃあ、いくら頑張つてもボールを防げるわけがない。

「でも、何だかそれつてずるいよね」

「…………卑怯」

「ま、別にいいんじゃない。公式試合ならともかく、これは授業の一環、言わば遊びなんだし」

当然、授業中に能力の使用は禁止されているが、この体育の時間は、先生の目が完全に行き届かないため、結構使つてる人が多い。（もちろん、テストの時や人に危害を加えるような能力の使用は別だが）よつて、体育の時間は能力使用OKというのが生徒間の暗黙のルールとなつてゐる。

「そういえば、今日屋上で会長と女子がバトつてたつていう噂聞いたんだけどさ。それ本当か？」

もう噂に・・・いや、あそこまで派手に暴れたら当然か。

「どうせ今日もお前らあそこで飯食つてたんだろうし、知つてるよな！な！」

「う、うん、まあね」

山吹の勢いに気圧されながら答える奏を見ながら、そういえば、山吹はこうこう話好きだつたな、とオレは一人苦笑した。

星枝市某田某所。

荒い息遣いをしながら壁に寄り掛かる一人の男がいた。服が所々破けていて、そこから血が流れている。

「はあはあ、くそっ！一体何なんだ、あいつらは」

幸運にも婆婆ばばに出られただと思った矢先、男は急に変な奴らに攻撃された。

そこからはいくら逃げても奴らは現れ、追いかけてくる。もう男は体力・精神力共にボロボロの状態となっていた。

（くつ、じんなことなら、先にあいつらと連絡を取つておくべきだつたか）

男は脱走したときには、散り散りになつていつた仲間を思い浮かべていた。

あいつらも今の自分と同じ目に会つてゐるかもしれないと思つて、何ともやりきれない気持ちになる。

（とりあえず今はあいつらに見つかならないように隠れて、傷と体力を回復することに専念しよう。そうすれば俺のエフで……）

男の意識はそこで途切れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8191x/>

---

IF 「仮定」の世界

2011年11月9日19時09分発行